



子宮摘出と機能障害・機能温存・機能再建 アップデート

産婦人科の手術は摘出するばかりで機能温存や機能再建するものはないといわれてきたが、いまや子宮の手術に限ってはそうとはいえない。卵巢摘出の場合と異なり術後のホルモン補充までは通常心配ないが、子宮を不用意に摘出してしまうと失われる機能がいくつかある。妊孕性が消失するのはもちろんのこと、子宮を支える靱帯などを失って骨盤臓器脱になることもあるし、長期的にみると冠動脈のトラブルが増えるという話もあるし、大きめに摘出すると排尿障害や排便障害を起こすこともある。ほかにも術後に性行為時の感覚が変わるという話もあり、患者としては術後の傷や侵襲も気になるところであろう。子宮摘出術は産婦人科手術の基本であり、出血が少なく目的を達成し安全に行われるのが一番であるが、子宮が骨盤臓器の1つとして支持組織の中心にあること、尿管だけでなく膀胱や直腸や卵巢に分布する神経や血管の走行も意識して手術を行わなければ、最終的に患者のためにならない。

最近では、子宮摘出の際に将来的な骨盤臓器脱を惹起させぬようにしたり、排尿障害が起こらないようにしたりする機能温存手術だけでなく、子宮や膀胱を支える組織が分娩や加齢などで損傷して骨盤底筋群の機能が失われた状態に対して新たに子宮を摘出して支持組織に固定し直す機能再建を目指した手術が行われている。また、手術の方法やアプローチに関しても開腹や単なる腹腔鏡だけでなくロボット支援下手術や腔からの内視鏡で子宮を摘出する方法も普及しつつある。一方で子宮頸部を残した手術のほうが望ましい症例が再検討されるなど子宮摘出術は確実にアップデートしている。さらに、もともと子宮がない方だけでなく、子宮を摘出したうえに別の子宮をドナーから臓器移植して妊孕性を維持させるという究極の機能温存・機能再建手術が準備段階に入っており、近い将来、日本でも現実のものになると思われる。

本特集は、子宮摘出と機能障害・機能温存・機能再建アップデートと題して、この分野で最先端の先生方にご執筆いただいた。本号が、皆様の子宮摘出のレベルアップになり、患者がその恩恵を授かることを期待してやまない。

(帝京大学ちば総合医療センター産婦人科 五十嵐敏雄)